

成人していても 風しんの ワクチン接種は 必要でしょうか？

**免疫を持たない人は
可能な限り
受けてください**

風しんは、風しんウイルスが感染して発症する病気です。発熱や発疹の症状が麻しんと似ていることから「三日ばしか」とも呼ばれ、子どもの病気というイメージを持つ人も少なくありません。

感染した人の中には、症状が現れないまま治る不顕性感染の人もいますが、高熱が持続したり、血小板減少性紫斑病（3千〜5千人に1人）、急性脳炎（4千〜6千人に1人）などの合併症によって、入院が必要となる人もいます。

2008年以降、全国の医師に義務づけられている保健所への届け出によると、2013年の患者数は



監修

川崎医科大学附属川崎病院
小児科 中野 貴司 部長
岡山市北区中山下2-1-80
TEL.086-225-2111

近年もっとも多い1万4357人。全患者の約70%が男性で、その約80%が20〜40代です。また、残り30%の女性患者でも、20代以上が約80%を占めています。

今や成人に多い病気といえる風しん。自分自身がかからないためだけでなく、家族や周囲の人々への感染を予防するには、ワクチン接種が重要です。

風しんは、自然感染や定められた回数回のワクチン接種によって体内に免疫ができると、二度とかかることはありません。また、風しんワクチンは、免疫を持つ人が接種して問題ないため、感染やワクチン接種の記憶がない人、あまいな人には、可能な限りワクチン接種をおすすめします。

妊婦

妊娠前半の妊婦の感染は、 赤ちゃんに重大な影響を及ぼすことも

近年、風しんに関して大きな問題とされている「先天性風しん症候群（CRS）」は、妊娠20週頃までの母体の感染により、風しんウイルスが胎盤を通過し、赤ちゃんにも感染して起こる病気です。その症状は、先天性心疾患、難聴、白内障の3大症状のほか、網膜症、糖尿病、発育・精神発達の遅滞など多岐にわたります。

CRSは風しん流行からしばらくして増える傾向にあり、2004年は10人、2012年10月〜2014年1月には41人の赤ちゃんがCRSと診断されました。

CRSから赤ちゃんを守るには、母体への感染を防ぐことが最も重要です。現在20〜40代の女性の10数%が風しんへの十分な免疫を持っていないため、予防にはワクチン接種が効果的です。なお、妊娠中は生ワクチンを接種することはできず、接種後2カ月間は避妊が必要なおことも忘れてはなりません。

妊婦が免疫を持っていないことが多い現状では、配偶者やパートナー、家族など周囲の人々もワクチン接種を受け、感染を防ぐことが望ましいでしょう。



ワクチン 接種

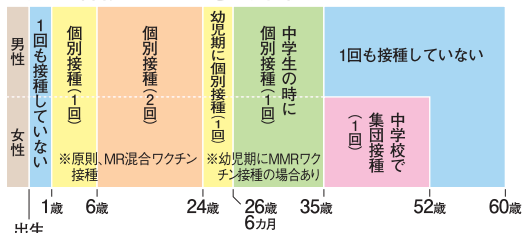
ワクチン接種率の低い 年代を中心に流行

1990年代前半までは5〜6年ごとに、全国的に大規模な流行が見られ、そうした流行時に感染した50代以上の人は、90%近い人が免疫を持っていると考えられます。

日本でワクチン接種が開始されたのは1976年で、翌年から女子中学生への定期接種が始まり、1995年から対象は生後12〜90カ月未満の男女となりました。この期間は男女中学生も対象でしたが、個人が病院で受ける個別接種だったため、接種率は激減しました。やがて男女幼児が定期接種の対象になってからは、全国的な大規模流行は見られなくなりました。

しかし、2012年後半から2013年にかけておこった流行は何年ぶりかの大きなもので、患者の大半は、ワクチン接種を受けていない20〜40代の男性だったのです。接種したか疑わしい人は、医師に相談しましょう。

●風しん含有ワクチンの定期接種状況（2014年4月1日現在の年齢）



※MR混合ワクチン：麻しん風しん混合ワクチン
MMR混合ワクチン：麻しん風しんおたふくかぜ混合ワクチン